
マフィアのボスですが何か？

麗雪・L・レイユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフィアのボスですが何か？

【Nコード】

N7720X

【作者名】

麗雪・L・レイユ

【あらすじ】

平穏な中学校生活を送りはじめた土田鈴蘭こと蘭。

運動神経は悪いが、クラス一の秀才。

しかし、それは蘭の表の顔だった…。

裏の顔はマフィアのボスとして、平穏な生活を死守すること！？

蘭は始まったばかりのこの平穏な生活を送り続けることができるのか！？

幸福が訪れる／繊細

「蘭！いったよ！」

「ふえ？」

蘭の頭上に飛来するボール。

見上げる蘭。

ゴーン

蘭の顔面に見事なまでに直撃した。

「あちゃ〜…」

「い、痛いよ…」

鼻の頭を抑える蘭。

「ごめん…あんたが運動神経ないのをすっかり忘れてた」

笑い飛ばす少女。

蘭の様子からしても、よくあるようだった。

「紅^{へに}…わざと…」

横でつぶやく少女。

「やっぱり…私をからかって楽しんでいるんだね、紅は」

脱力する蘭。

(うん…諦めよう…)

今は四時限目の体育の授業。

競技はバレーボール。

(“運動神経がない”…か)

人知れず蘭はため息をついた。

キーンコーンコーン

授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

「うっし、昼飯だ〜」

ものすごいスピードで教室にもどる紅。

「…撫子、ゆっくりもどろうか」

「うん、紅についていく必要ない…」
そういうと二人も教室へとむかった。

「いや、うまかった。わらわは満足じゃ」

ほっほっほ、と扇子を手に持ち扇ぎそんな雰囲気です。紅が言った。

「あんたは殿か何かか」

すかさずつつこむ蘭。

「うむ、殿じゃ」

「…紅に何を言っても無駄」

撫子がボソツとつぶやいた。

「撫子ヒドツ！」

そんなたわいもない話をしているときだった。

蘭は急に背後から声をかけられた。

「土田」

振り返ると一人の少年がいた。

「えっと…どちら様？」

「隣の一年二組の大木蓮だ。土田…こんなところで悪いんだが…」

(なんだろう…こんな教室の中で…)

中学となれば男女の会話は極端に減る。

その中で話があるというのだからきつと大切なことなんだろう、と蘭は思っていた。

「俺と付き合ってくれ！」

ぶほッ

隣でむせる紅。そんな紅の背中をさする撫子。

「えっと…ごめんなさい。まだそんなこと考えられなくて…」

「そうか…時間をとらせて悪かったな、じゃ」

大木はそういうと教室から出ていった。

「ひゅ、もてる女はツライねえ」

「蘭の気持ち、分かる。今はまだ考えられない」

「…うん。大木に悪いことしたかな…」

うつむき真剣に悔いる蘭。

「ううん、考えすぎ。今はそれでいいと思う」

微笑む撫子。

「ありがとう、撫子。ちょっと気が楽になったよ」

笑みを返す蘭。

「うわぁ…もてる女の悩みだ…」

なんとも言えない表情でそんな二人を見ていた紅であった。

幸福が訪れる／織細（後書き）

サブタイトルは、主人公蘭こと「鈴蘭」の花言葉です。

包容力/熱狂

「ウキッ、ウキキキッ」

紅の頭の上で一匹のサルが跳ねた。

「ルモもそう思っつてさ」

「ウキッ！」

なぜ中学校にサルがいるのか、そう思うのが普通だ。

それはこの世界がそういう世界だからである。

この世界にはたくさん**の性質を持つ生き物がいる。**

例えば、物を燃やす能力をもつ生き物や物を氷らせる能力をもつ生き物。

それぞれ同じ種類の生き物でもまったく違う能力をもっている生き物もいる。

そんな生き物たちのことをこの世界では、**靈生れいせいと呼んでいる。**

そんなこの世界では人間は、生まれてすぐに自分にあつた能力をもつた靈生と契約をする。

契約は、お互い（契約者と靈生）の同意により成り立つ。

だが、生まれたての赤子には言葉はおろか、文字も伝わらない。

そんな中でどうやって自分にあつた靈生と契約するのかというと、本質的に相性のいい者たちが契約する。

本質とは、この世界の生き物（人間も含む）すべてが持っているもので、生まれたときに分かる。

そして、相性のよい生き物同士で契約を行う。

小学校では自分の契約した生き物（契靈）について学び、中学校では次の段階を学ぶ。

その次の段階とは、契靈の力を引き出す、ということだ。まあ、よ

うは実践である。

そういう理由により、各地域の中学校では契霊を学校につれてくるのは常識なのである。

「相変わらず似たような性格なのね、紅とルモは」
あきれたように言う蘭。

「契霊は契約主に似ると小学校で習ったが…ここまでとは…」
真剣に考え込む撫子。

「はあ…うん…もういいよ」

疲れ果てた様子の紅は、机へと倒れこんだ。

昼休みもあとわずかとなった頃、三人組の少女たちが三人で談笑をしていた蘭に話しかけた。

「土田さん、ちよつといいかしら？」

いかにも“お嬢様”風の少女が気取った態度で蘭に話しかける。

「何の用かな？」

(やな予感がするなあ…)

内心ではそう思っていたが「無理です」とはさすがに言えなかった。

「よくも…よくも私の大木君を振ってくれたわね！」

「私の華樹君もよ！」

「この男たらしが！ちよつと頭がよくて、ちよつと可愛いからって調子に乗ってんじゃねえよ、バカ！ブスはブスらしく三木たちとず〜っと遊んでいればいいのよ」

「なんなら、三人で同性愛でもしちやえば？」

きやはははっ、きやははははっ

三人の下品な笑い声が教室に響く。

(何しに来てるんだらう…馬鹿らしいなあ…)

蘭は心の中で思ったが、もちろん声には出さなかった。
が、ほかの二人は違ったようだ。

「…そうだな、三人仲良くというのも悪くない」

「はは、いいねそれ。私もハミゴにならなくてすむし」
心の中で思ったことを口にする撫子たち。

（頭痛が…）

こめかみを押さえる蘭。

三人がそれぞれの反応で返した。

ようは、「黙つとけば？アンタらに言われる筋合いはないんだよ」ということだ。

「き、貴様らあ！！」

一歩後ろにいる少女が怒鳴る。

「調子にのるなあ！！」

そういうと、お嬢様風の少女の肩に乗っている猫の毛の色が白からオレンジ色へと変わった。

包容力／熱狂（後書き）

今回のサブタイトルは、紅こと「紅花」の花言葉です。

思慕／貞節／才能

お嬢様風の少女の手には一丁の拳銃。

今現在の学校教育では、契霊の能力である霊式を使うには、霊式の形：波である霊波を自分の波長とあわせ、霊式を使用する霊合というものを主に教えている。

だが、それは“主に”教えているのであって他の方法も、もちろん教えている。

それは、物体を特定し、その物体に霊波を添えることで霊式を発動する、霊添という方法だ。

霊合の指導は基本的に、小学段階で終了になっている。

そして、中学段階では霊添を教えるのが基本となっている。

中一といえど、既に授業は始まっており、もちろん霊添の指導も始まっている。

そして、ほとんどの生徒は武器（殺傷能力の高い物）に霊波を添える。

「身の程をわきまえなさい！私はある土村家の娘よ！調子に乗らないで！！」

そういうと、銃口を蘭へと向け勢いよく引き金を引いた。

銃口からは銃弾の形をしたオレンジ色の炎が放たれた。

その炎は真っ直ぐ蘭をめがけて飛んでいく。

（まずい！このままだとあの霊式が蘭に当たる！！）

そう思うが早いか、撫子は蘭の前へと歩み出た。

「撫子　！？」

悲鳴交じりの蘭の声が教室内に響く。

撫子の足元にいる白い兎が蒼く光り始め次の瞬間には撫子の前に水の壁が完成していた。

「な、私の炎の弾丸を相殺するなんて…。その白兎…ラビッタシリーズか!？」

床にひざをつき、信じられないと呟く土村の娘。

霊生には、稀に強い霊波をもって生まれてくるものがいる。そのような霊生を一般に、れいしん霊真と呼ばれている。

そんな霊真には一般の霊生と識別するために、識別名称として各靈性ごとにシリーズ名がつけられている。

撫子の白兎は「兎」という霊生の分類の中の霊真。「兎」の霊真の識別名称はラビッタシリーズと呼ばれるシリーズだ。

普通、霊真の力は強大すぎるため人間と契約できない。正確には、人間の方が霊真の霊波に耐え切れない。そんな理由から、基本的には研究対象ということを実験場送りになる。

が、稀に逆の場合もある。

霊生が人間の波長に勢い負けしてしまう場合だ。

この場合、その人間は「契霊なし」と言うわけにはいかない。となると、「同じ強い霊波をもつ霊真との契約がいいのでは?」という結論に至り、撫子たちのような契約者たちが近年増えてきた。

「あなたは私を怒らせた…。私の大切な友達に攻撃をした…。学校の中では授業以外では使ってはいけない靈式を…武器を…一時の感情に任せて使った!」

撫子が怒りを爆発させた。

撫子のいうことに言い返す言葉がない土村の娘。

そこに一人の女の教師が入ってきた。

「誰！さっきここで靈式を使ったのは！！」

半ば切れ気味の教師の姿にしぶしぶ手を挙げる撫子と土村の娘。

「あなたたちね：事情は指導室で聞きます。来なさい」

二人を連れて教室を出て行く教師。

その場にいた残りの関係者である蘭たちはただ連れて行かれる撫子と土村の娘を見送ることしかできなかつた。

思慕／貞節／才能（後書き）

今回のサブタイトルは、「撫子」の花言葉です。

愛／温かい心

「帰ってこなかったね、撫子」
紅がおもむろに口を開いた。

あの後撫子は結局帰って来なかった。
二人で学校中の先生に尋ねてみたが、誰一人として答えてくれなかった。

撫子がどうなったか分からないまま最終下校時刻となり、二人は仕方なく学校の門をくぐった。

（私のせいだ：私があの時もっと早く動いていたら撫子は霊式を使わずに済んだ！それなのに…）

思わず下唇を噛締める蘭。
唇から血が滴る。

「ウツキー！ウキキキキー！！」

紅の頭の上で飛び跳ねるルモ。

「ウツキー！」

必死に叫び訴えるルモ。

（ルモ…何言ってるか分かんないけど、励ましてくれてる…）
そう思うと少し気分が楽になった。

「蘭のせいじゃないよ」

不意に今まで隣で黙っていた紅が口を開いた。

蘭は自分より少し背の高い紅を見上げた。

「って、ルモは言ったんだよね」

「ウツキー」

仲良く、まるで言葉が通じてるかのようには話す紅とルモ。

「あ、ほらルモはアタシの契霊だから。なんとなく分かるんだよね、何言いたいのか」

笑いながら言う紅。

(これだけ仲がいいもんね…当然、か)
蘭もそんな二人につられて口元がほころんだ。

「さて、アタシは家こつちだからここで。
でしょ?」

蘭の家はそつち

「うん。
また明日」
そういうと、二人はそれぞれ帰路へとついた。

「ただいま」

蘭が家の扉を開くと、一組の男女が玄関にいた。

「おかえり、蘭。遅かったね?大丈夫だった?」

心配そうにたずねる男。

歳は17ぐらいだろう。そばにしていると落ち着くような空気を持っている。

「うん、大丈夫。心配かけてごめん、すいにい睡兄」

「謝らせたくて睡蓮は言ったわけじゃないんだぜ?そんなに小さくなるなつて」

隣にいた女も言った。

ワイルドな笑みを浮かべる女。

睡蓮と面立ちが似ていることからおそらくは兄妹だろう。

「ところで薔薇姉…何企んでるの?」
ぎくっ

「べ、別に」
目を逸らす薔薇。

「知ってる?薔薇姉。人はやましい事があると目を逸らすんだよ?」
今度は蘭の目をジーっと見つめる薔薇。

(薔薇姉…見事にはまる…ちょっと楽しいかも)

「で、結局どうしたの？薔薇姉」

「別に」

意味深な笑みを浮かべ続ける薔薇。

「…仕事…あるの…？」

と蘭が言い切る前に薔薇が蘭に抱きついて(飛びついて)蘭の体を揺さぶった。

「そうだぜ！仕事だぜ！！早く行こうぜ。蘭が帰ってくるの待ってたんだからさ」

なおも体を揺さぶられている蘭。

「ば、薔薇！蘭の目が回ってるよ！！」
手を止める薔薇。

ばつが悪そうに視線を泳がす姉を蘭はいつものこと、と割り切っていた。

「わ、わりい…今は制御されてるんだっただな…」

「…いいよ、気にしてないから」

苦笑交じりの言葉になったが蘭は心底楽しそうに言った。

「それより仕事でしょ？行く用意するからココで待ってて」

ああ、二人が頷くのを見て、蘭は自分の部屋へと入っていった。

愛ノ温かい心（後書き）

今回のサブタイトルは、薔薇姉こと「薔薇」の花言葉です。

やさしさ／甘美

「ま、待ってくれ！」
後ずさりする男。

「み、見逃してくれ!!」

男の正面にはフードを被った少女が一人いた。

その者の周りには、一匹の黒に青紫の蝶が飛んでいる。

「何でも言うことを聞く！絶対だ!!だから」

「一つ教えといてやる」

男の言葉を遮るように話始める少女。

「この世界に“絶対”はない。お前が見たのだとすれば、それはまやかしだ」

その場に崩れ落ちる男。

「お前に選択肢はない」

少女が、右手を前へとそつとのばすと男は一瞬で氷付けになっていった。

少女の手のひらから零れ落ちる白い花びらが、氷付けの男の足元に落ちる。

「よい夢を…」

立ち尽くす少女。

「終わったか？麗」

いつの間にか、背後に立つ女。

「ああ。」

後を頼んでもいいか？」

「おう、任せとけ。」

先に、睡と一緒に帰っとけ」

ワイルドな笑みを浮かべる女。

無言で頷く麗。

次の瞬間には、たくさんの黒に青紫の蝶と共に麗は消えていた…

「おはよ、蘭」

蘭が教室に入るなり、窓際の席の紅が声をかけてきた。

(…ああ…今の名前は“蘭”…だっけ…?)

「…おはよ、紅」

自分の席で、机に倒れこむ蘭。

(…気分悪…吐きそう…。体の中をぐちゃぐちゃにされたみたいだ…)

「ちょ、蘭大丈夫!? 顔色よくないよ?」

心配そうに駆け寄る紅。

(ああ…心配かけたらいけない…)

蘭は苦笑いを浮かべた。

「少ししんどいだけだから…大丈夫だよ?」

思わず疑問系になった言葉。

「心配だな」。蘭は変なところ無理するからな…」

苦笑いしながらぼやく紅。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る。

自席に戻る生徒たち。

ガラガラッ

扉を開ける音と共に教室に担任の女教師が入ってきた。

そして、その後ろにつくように撫子が入ってきた。

「ちょ、撫子！…どうしたの、その包帯！！」

紅が思わず叫んだ。

撫子の体のいたるところに、不自然に巻かれたたくさんの包帯。駆け寄ってきた蘭と紅から目を逸らす撫子。

「…別に…こけただけ…」

(十中八九嘘だな…こけたにしては傷のある位置がおかしい) 心の中でつぶやく蘭。

「嘘」

すかさず口にする紅。

「幼稚園のときからアンタとずっと一緒にいるけど、アンタがそんなに派手にこけたとこアタシ見たことないもん」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

「授業を始めるわよ。みんな、席につきなさい」
教師に言われ、渋々席につく三人。

「…放課後…言う…」

小さな声でつぶやいた撫子。

「ダメ」

「昼休み」

蘭と紅にそう言われた撫子は苦笑いを浮かべた。

やさしさ／甘美（後書き）

今回のサブタイトルは、睡兄こと「睡蓮」の花言葉です。
（今回の更新では、名前しか出てきていませんが…）

自然への愛／持続性

「さ、撫子。昼休みになったからもちろん昨日何があったか教えてくれるんだよね？」

紅が撫子に詰め寄る。

「…」

無言で顔を逸らし、目を合わせようとしない撫子。

「はあ…これ、本当は言いたくないけど…」

蘭がおもむろに口を開いた。

「そこが撫子の一番悪いところだよ」

さっ、と顔を上げ蘭を見る撫子。

そんな撫子を見ながら、蘭は言葉をさらに続ける。

「自分の中に閉じ込めて、勝手に自分だけで背負い込んで…私たちは、幼稚園からの友達でしょ？ 幼馴染でしょ？
親友でしょ？」

蘭の最後の一言が撫子の心を揺さぶった。

静かに頷く撫子。

「だったら、遠慮なんて要らないってのも分かるでしょ？」

諭すように言葉を紡ぐ蘭。

「そっだよ、撫子。アンタはもっと私たちを頼っていいんだよ。むしろ頼って。アタシも頼りたいから、いっぱい」

紅の言葉に微笑みながら頷く蘭。

「…私は…：私は…頼ってもいいの…？」

恐る恐る口を開き、言葉を紡ぐ撫子。

「当たり前でしょ、親友なんだから。私たちは」

蘭が微笑んで言った。

撫子の瞳から一筋の涙が頬を伝った。

何も言わず、静かに涙を流す撫子。
隠さずに、ただ流れるがままに…。

(たくさん我慢してたんだな…)

静かに泣く撫子を見て、蘭は心の中でそう思った。

「…ごめん…二人とも…」

頭を下げる撫子。

「いいよ、気にしてないから」

微笑みを返す蘭。

「まったく…まわりのことも次からは考えてよね！」
頬を膨らませそっぽを向き、怒っている風を装う紅。
その証拠に、紅の瞳にもうっすら涙が浮かんでいた。

「教えてくれる？昨日何があったのか」

蘭が優しく問いかける。

無言で、しかししっかりと頷く撫子。

キーンコーンカーンコーン

しかし、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「…」

無言になる三人。

「KYなチャイムめ…。いつかこの恨みを…」
ぼやく紅。

「放課後は？」

蘭の提案に頷く紅。

「でも学校で、という訳にはいかないだろうし…」
撫子の言葉に頷いてしまう、蘭と紅。

「とりあえず、保留にしておこうか…」

蘭が切り出した。

「うん、そだね」

紅がそれに頷き、撫子も頷いて昼休みが終わった。

自然への愛／持続性（後書き）

今回のサブタイトルは、以前登場したキャラクター、大木木蓮の「木蓮」の花言葉です。

古風 / 風情 / 秘密

キーンコンカーンコン

最後の授業終了のチャイムがなる。

「さて…どうする？」

放課後になり皆が帰路につく中、三人はまだ教室にいた。

「…明日は土曜で学校休みだし…家に泊まってくる？」

蘭が沈黙を破り、そう言った。

「蘭の家にお泊り!?なにそれ!超楽しそう」

目を輝かせて叫ぶように言う紅。

いや、叫ぶ紅。

「蘭:家の人に確認しなくてもいいの？」

撫子がかもつともなことを言う。

「うん、そうだね。一応確認してみるけど、たぶん大丈夫だよ？」

ちよつと待ってね、そういうと蘭はポケットからコンパクト型通信機、略してCFCIを取り出し、家の

回線につないだ。

CFCIは片手サイズのパソコンみたいなもので、これをもってない人間は数少ない。

対面式通話を可能にする高画質カメラ搭載の優れものだ。

プルルル、プルルルル

呼び出し音が三回なった頃、回線が繋がった。

『もっしもし、土田ですが何か?』

間伸びした声で画面に映る一人の女。

(OKって言うてくれたのはいいけど、何か裏がある気が…)

「薔薇姉、念のため確認してもいいかな？」

不安を拭いきれない蘭は薔薇に聞くことにした。

「ん？なんだ？」

首をかしげる薔薇。

「父さんか、母さん…他にも何か言ってなかった？」

「蘭…お前…相変わらずすごいな。なんで分かったんだ、他にも何か言っただってこと」

興味深々に聞いてくる薔薇。

「なんとなくだよ」

『なんとなく…か。で、親父が言ったことだが、どうせ泊

めるのなら晩飯も一緒にどうだ？…だとさ』

(やっぱり…何も考えてないんだから…)

「ちよつと待ってね」

古風 / 風情 / 秘密 (後書き)

今回のサブタイトルは、蘭や薔薇、睡蓮の父親の名前である「空木」の花言葉です。

変わらぬ愛／誠実

軽快な音楽が響く。

画面には雪の結晶は映っている。

「なんか父さんが、晩御飯と一緒に食べないかってさ。…どうする？」

顔を見合わせる撫子と紅。

「お邪魔でなければ、いいかな？」

「蘭の家の家庭料理食べてみたいしー」

「OK、じゃあそう言っとくね」

二人が頷くのを見て、顔をCFCIに戻した。

「薔薇姉、聞こえてた？」

「おう、今日の晩飯は二人分追加だな。

親父とお袋にも

伝えとく」

画面の向こうでワイルドな笑みを浮かべる薔薇。

「うん、それじゃあお願い。」

「おう」

「あ、母さんも何か言ってなかった？」

蘭が思い出したように言った。

「おお、忘れるところだった…」

「そのまま忘れなくてよかったね…。忘れてたら、桔梗母さんに殺されてたかもよ…？」

「だな…」

同意する薔薇。

(考えただけでぞっとするぜ…)

「で？」

話を戻す蘭。

『なんか、蘭の部屋は三人寝るには狭いだろうから、母さんたちの部屋を貸すからそこで寝ろってさ』

「薔薇姉…そんな大切なことを忘れないですよ…」

『わりい、わりい』

形だけは謝ってみせる薔薇。

形だけなので、悪びれている様子はまるでない。

「分かった。そう母さんに伝えておいて」

『おう。んじゃーなー』

そういうと蘭は回線を切った。

() って、桔梗母さんたちの部屋はアジトの中にあるじゃん！()

もう一度家への回線をつなぐ蘭。

『もつしもーし、土田ですが…って、なんだまた蘭か。どうした？』
暢気に話す薔薇。

「桔梗母さんたちの部屋ってさあ、薔薇姉。」

『うん？なんだ？』

「ああ、安っぽさごくわずかにおける百日草日本酒…？」
隣にいた紅と撫子は、蘭の発した謎の言葉に絶句した。

(え…安っぽさごくわずかにおける…？)

(百日草日本酒…？)

首をかしげる二人。

() (蘭何言ってるの！？) ()

二人には、さっぱり分からなかった。

が、どうやら薔薇には分かったらしい…。

『そういえばそうだな…。それは確かにまずいよな…』
CFCIの向こうで考える薔薇。

『ちよつと待ってる、今もつ一回聞いてきてやるから』
「うん、お願い」

軽快な音楽が流れる。

画面には綺麗な花畑の風景が映る。

「…ねえ、蘭」

紅がおもむろに口を開く。

「うん？どしたの？」

首をかしげながら紅の方を向く蘭。

「<ああ、安つぼさごくわずかにおける百日草日本酒>…って何？」
「ああ、あれかあ…。あれはねえ、聞かない方がいいと思う。

うん、世の中には知らない方が幸せなこともあるよ」
ごまかす蘭。

「知らない方が幸せって…アンタの家で一体何をやってるのさ…」

「…紅、やめよう。プライベートの詮索はルール違反」

撫子が「気になる」と目で言ったまま、紅を止めた。

「ま、そういうこと」

謎の微笑を浮かべ、蘭は薔薇からの返事を待った。

変わらぬ愛／誠実（後書き）

改稿しました。

少し長くなり、内容も若干変えました。

今回のサブタイトルは、蘭たちの母親である「桔梗」の花言葉です。

追憶

「母さん：だから、蘭たちに母さんたちの部屋を使わせるのなら、アジトの中まで入れないといけないだろ？」

「ええ、そこまでは分かるわ。でもなぜ使わせたらいけないの？別にばれっちゃってもいいじゃない」

まるで他人事のように言う桔梗。

「いや、ばれたらマズイだろ！」

「お、落ち着いてください！薔薇様！！」

興奮する薔薇を押さえ込む一人の男。

「放せ、橘たちはな！！」

「放しません！とりあえず、落ち着いてください！！」

渋々おとなしくなる薔薇。

（くそっ…母さんを何とかして説得しないと…。このままだと、家うちがくマフィア>だっということがばれちゃう…。何かいい手は…）

「桔梗様もこの家がくマフィア>だとばれるのは、よくありません
「そうなの？ 分かったわ、橘。これからは、そういう

「うこととも考えるわ」

「お願いします」

（そうしてもらえないと、僕がもたない…）

薔薇は橘が桔梗をなだめている間も桔梗を納得させることを考えていた。

（待てよ…。あ！いい手があるじゃねえか！あの手なら…）

薔薇は心の中で思いついたことをそのまま口にした。

「母さん、可愛い娘の蘭が、学校に行けなくなっても

」

「ダメ！！それだけはダメだわ！！」

いいのか？、と薔薇が言い終わる前に桔梗がそう叫んだ。

「なんとしても私たちの部屋を使わせてはいけないわ！！」

（簡単だな…）

こうして桔梗は悲しいことに、薔薇にそう心の中で思われた。

『おい、蘭ー』

CFCIの軽快な音楽が止まり、画面の向こうには再び薔薇が現れた。

「聞こえてるよ、薔薇姉」

『部屋は、睡と俺の部屋を使うといい。あの部屋は仕切りをもっ取って準備しておいたから』

「ありがとう、薔薇姉」

画面の向こうにいる薔薇に向かって微笑む蘭。

『にしても、蘭は相変わらず頭いいなー。俺なんか、ちんぷんかんぷんだったぜ』

「なんのこと？」

首をかしげる蘭。

『さっきの、くああ、安っばさごくわずかにおける百日草日本酒のことだぜ』

「ああ…。分かった薔薇姉もすごいと思うんだけど…？」

『いやー、隣にいた睡が言ったんだよ』

画面の向こうで苦笑いする薔薇。

「そうなんだ…さすがは睡兄。頭の回転が速いんだね」

『お褒めにあずかり光栄です、ってね』

一人の男が画面に映る。

「睡兄、薔薇姉から聞いてると思うけど…」

『うん、部屋の用意は薔薇が言ってた通りちゃんとしてあるから』

微笑む睡蓮。

『じゃ、そういうことだから。ちゃんと、用意して待ってるぞー』
「うん、じゃあまた後で」

そういうと蘭は再び回線を切った。

「でもさすがは蘭だよな」

「<ああ、安っぱさごくわずかにおける百日草日本酒>でしょ?」
睡蓮の言葉に頷く薔薇。

「アナグラムは蘭の得意分野だからね」

「そうそう、で。あれどうやって解読するんだ?教えてくれよ、睡蓮」

はあ

わざとらしくため息をつく睡蓮。

「薔薇: 僕、前にも教えた気がするんだけど?」

「気のせいだって。それに、蘭は毎回毎回難しいのばかり言ってくるんだぜ?俺に分かるわけないだろ?」

自信満々に言う…威張る薔薇。

(暢気なこった…。教える僕の身にもなってほしいものだよ…)
そんな睡蓮の心境を知る由もなく、薔薇は睡蓮をせかす。

「早く教えてくれよ、睡蓮」

(はあ…。いいかげん覚えてよ…)
心の中でそう思いながら、何回目になるのか分からないアナグラムの説明を始めた。

「まず、普通に<ああ、安っぱさごくわずかにおける百日草日本酒>を英語に変換する」

睡蓮が薔薇にも分かるように説明を始める。

「すると、A h a Z i n n i a S a k i A t T a t J o
tになる。…ここまでは大丈夫だよな？」
睡蓮の確認に頷く薔薇。

「そして、蘭のアナグラムはすべて言いたい日本語をローマ字に変換して、それをさらに並べかえて英語にして、意味の通る文に意識されているんだ」

首を九十度にかしげる薔薇。

「俺にも分かるように説明してくれ…」

「これ以上簡単な説明はないよ」
ぱつさり切る睡蓮。

「続けるよ」

だから、さつき英語に変換した、A
h a Z i n n i a S a k i A t T a t J o tを日本語に
なるように並び替えて、さらに、何が言いたいのか最大限考えなが
ら日本語に並び替えると…」

何処からか紙とペンを持ってきて、書いていく睡蓮。

「t a s h i k a a z i t o n i a t t a n j a…?」

あ！<確かアジトにあつたんじゃ>!!」

「正解」

(なんとか理解してくれた…)

睡蓮は、一人心の中のため息をついた。

「蘭は、これを言いたかった。だけど、友達が横にいる状態でこれ
を言つと」

「<アジトって何?>ってなるから、それを避けるためにアナグラ
ムを使った…というわけか」

薔薇が睡蓮の言葉を引き継いで言った。

その言葉に無言で頷く睡蓮。

「だから、次からは分かった振りして僕に聞きにこないでね」
謎の笑みを浮かべる睡蓮。

「お、おう」

その笑みに気押された薔薇は引きつった笑みを浮かべ、頷く以外に出来なかった…。

追憶（後書き）

今回のサブタイトルは、薔薇の側近的存在の「橘」の花言葉です。少し長くなってしまい、すみませんでした。

靈感／ひらめき／直感／神秘

「ということ、今晚は家に泊まってもいいってさ」
CFCIをポケットに直しながら蘭が言った。

「やったね 初めて蘭の家に行ける！」

（謎は残っているけど…！！）

「…謎だった蘭の私生活が…今日、明らかに…」

（謎の言葉の意味も明らかに…！！）

動機が不純な二人。

「…一体私の家で何をやる気なのさ…」

一人頭を抱える蘭。

「それに、撫子の身に何があったのかを聞くのが本来の目的なんだからね？」

「忘れないでよ？、と念を押す蘭。

「だって、幼稚園からずっと一緒なのに蘭の家って行ったことがないんだもん」

「…そうだったっけ？」

紅の言葉に蘭が首をかしげる。

撫子がそれに答える形で頷く。

（ふーん…そうだったんだ…。覚えてないや…）

蘭はそう思ったが、もちろん口にはしなかった。

「それを言うのなら、私だって紅の家には行ったことないよ？」

「あれ！？そうだったっけ？」

頷く蘭と撫子。

「ま、どうするか決まったことだし帰りますか」

「そだね」

紅の提案に頷く蘭。

「蘭の家までレッツラゴー！」

「…紅のテンションについていけない…」

「蘭、紅はほつとしても大丈夫」

と、本人が聞こえてないのをいい理由に、言いたい放題な蘭と撫子であった…。

「あ、そうだ。着替えとか取りに戻る？」

蘭が二人に問う。

「うん…どうしよっかな…」

撫子は？、と聞こうとしたが紅は口に出すのをやめた。

「…私はいつも着替えを持ち歩いてるから大丈夫」

スチャ

かばんの中から出し、見せる撫子。

「やっぱり…」

思わず紅がつぶやいた。

言われた当の本人は何のことだか分からない、というような顔をしていた。

「私はいつ服が汚れてもいいように持って来ているだけ」

さも当然、といった顔で言う撫子。

(うん…もういいや…)

紅は心の中でつつこむのを密かに諦めた。

「じゃあ、アタシ取りに帰ってもいい？」

紅が手を挙げて言う。

「いいよ。」

じゃあ紅の家に行ってから、私の家に行

くルートでいいかな？」

蘭が二人に確かめる。

「OK」

「うん」

二人が答えるのを見て、三人は教室をあとにした。

「へえ…ここが紅の家か…」

そういう蘭の目の前には大きな和風の門構え。

「くぐるのが怖いような…」

中からは、次々と厳つい男が出てくる。

「おう、紅。今帰ったのか」

と、一人の坊主頭の厳つい男が声をかけてきた。

「うつす。うん、今日は蘭の家でお泊りなんだ。だから、着替えを取りにきたの」

「そうか。すまねえな、蘭ちゃん。よろしく頼むわ」
軽く会釈すると去っていく男。

「…あれって確か、紅のお父さんだったよね？」

蘭が確認の意を込めて、紅に問う。

「そだよ。三木金縷梅^{みきまことひく}」

「昔と随分雰囲気が変わったような…」
蘭がつぶやく。

（昔はもつと柔らかい雰囲気をもった人だったような…）

「そかな？前からあんなだよ、親父は」
首をかしげる紅。

「…紅、一つ確認」

「うん？何？」

撫子が、なんともいえない眼差しで紅を見る。

首をかしげる紅。

「紅の家は…やくざか何か…？」

長い長い沈黙。

「な、何言つてのよ撫子！ち、違つよ！…！」
手をブンブン振り回す紅。

「紅…首筋から刺青が見えてるよ……？」

蘭の指摘にパツと首筋を隠す紅。

「…見えてた…？」

「ちらつと……だけどね……」

重く長い沈黙。

それを破つたのは、一人の可憐な少女だった。

靈感／ひらめき／直感／神秘（後書き）

今回のサブタイトルは、紅の父親の「金縷梅」の花言葉です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7720x/>

マフィアのボスですが何か？

2011年12月16日01時52分発行